

# 哲学思想の基礎

## 第二部：世界を理解する哲学

担当：山口裕之

# 前回の小テストの解答

# 問1

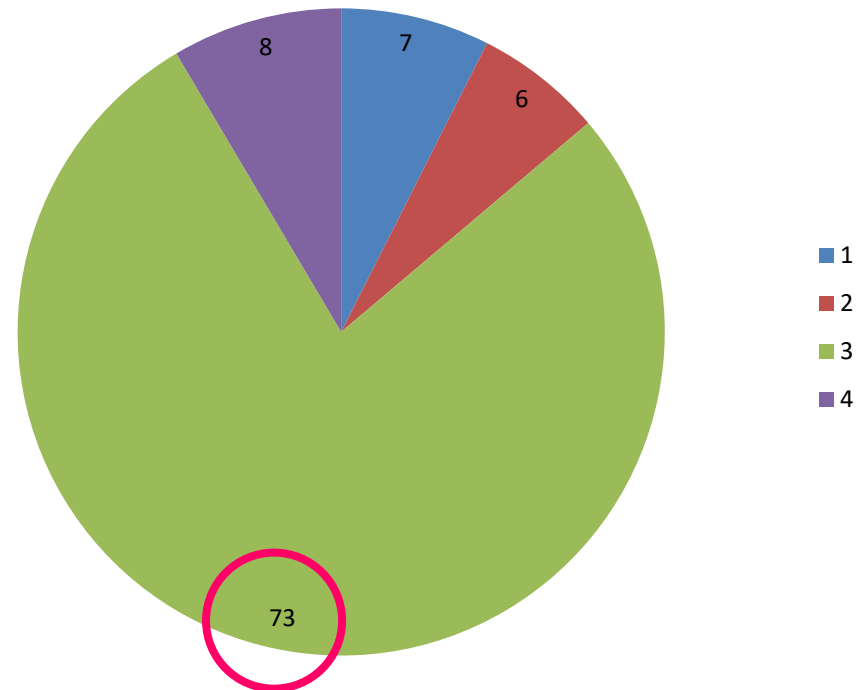
• 哲学は何を問題にしているのか。

① 人それぞれに考え方が違うのに、どうすれば普遍的な科学的認識が得られるか。

② 一見すると簡単なことを深く考えると謎が見えてくるのはなぜか。

③ 論理的に考えると生成変化は存在しないはずなのに、この世界には生成変化があふれているのはなぜか。

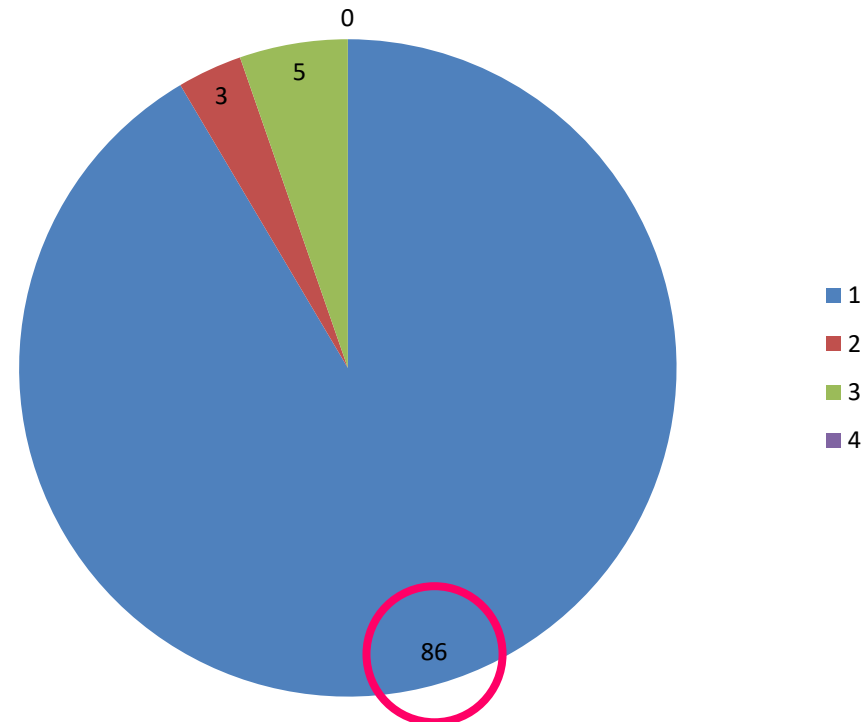
④ 論理的に考えると不変のものは存在しないはずなのに、この世界には不変のものがあふれているのはなぜか。



# 問2

- 「質問の三要素」として**言っていない**のはどれか。

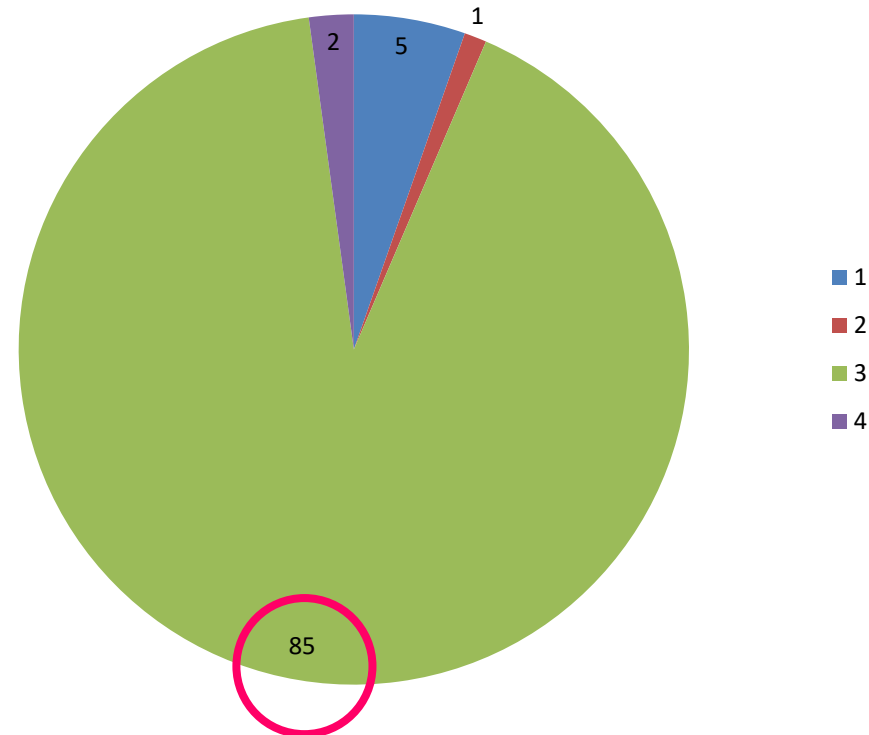
- ① 自分なりの感想。
- ② 質問する理由。
- ③ 自分なりの解答。
- ④ そう解答する根拠。



# 問3

- この授業ではこれまで「正しさ」とは何だと説明しているか。

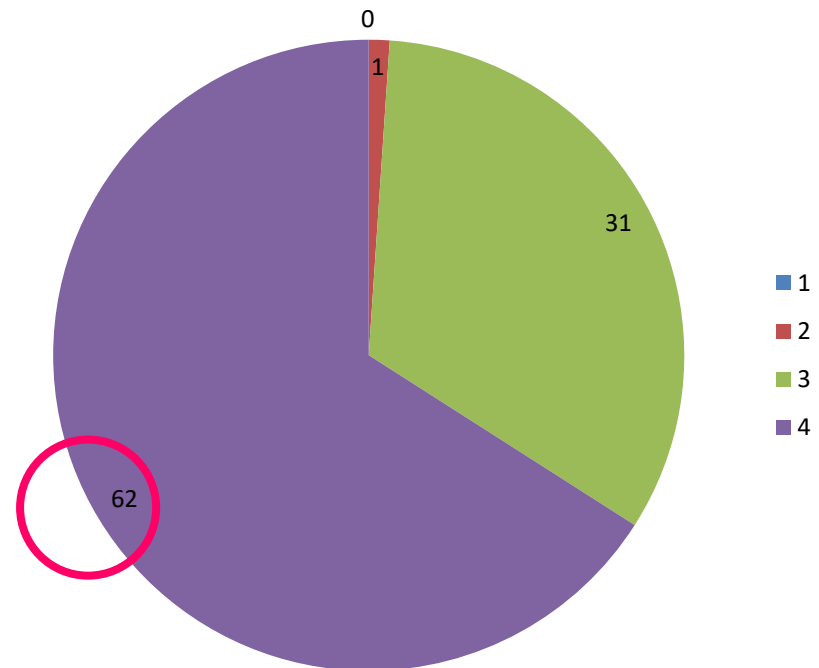
- ① 社会的に認められていること。
- ② ある人が正しいと信じていること。
- ③ 論理的に筋が通っていること。
- ④ ある人が学んで知ること。



# 問4

- プラトンのイデア論について正しいのはどれか。

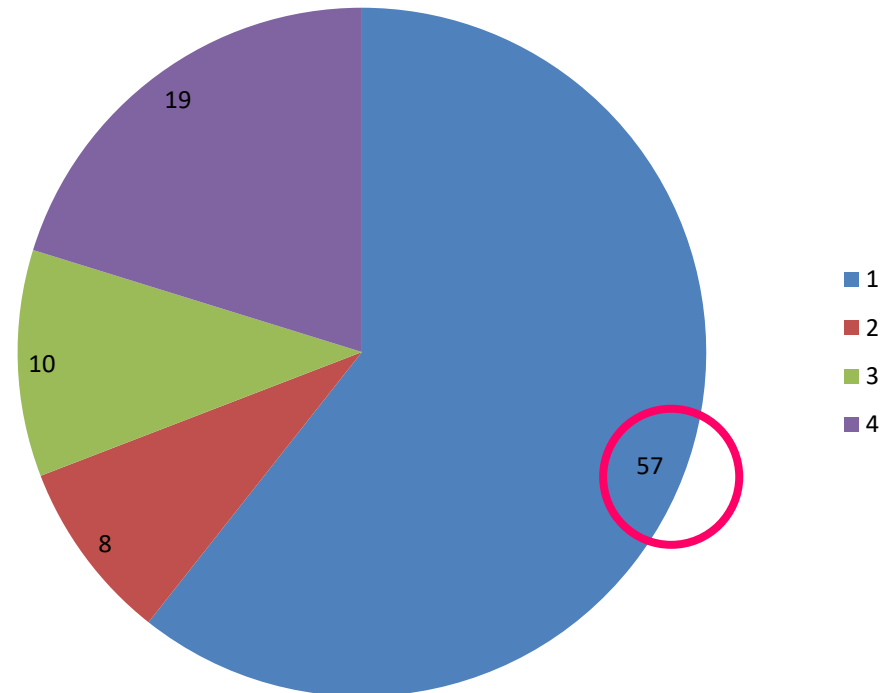
- ① プラトンは人間が名づけることでイデアが形成されると考えた。
- ② プラトンは素材にイデアが取り付くことで個物が生成すると考えた。
- ③ プラトンはイデアは個物に内在すると考えた。
- ④ プラトンはイデアは個物とは別のものとして実在すると考えた。



# 問5

- プラトンのイデア論のもっともらしい点はどこか。

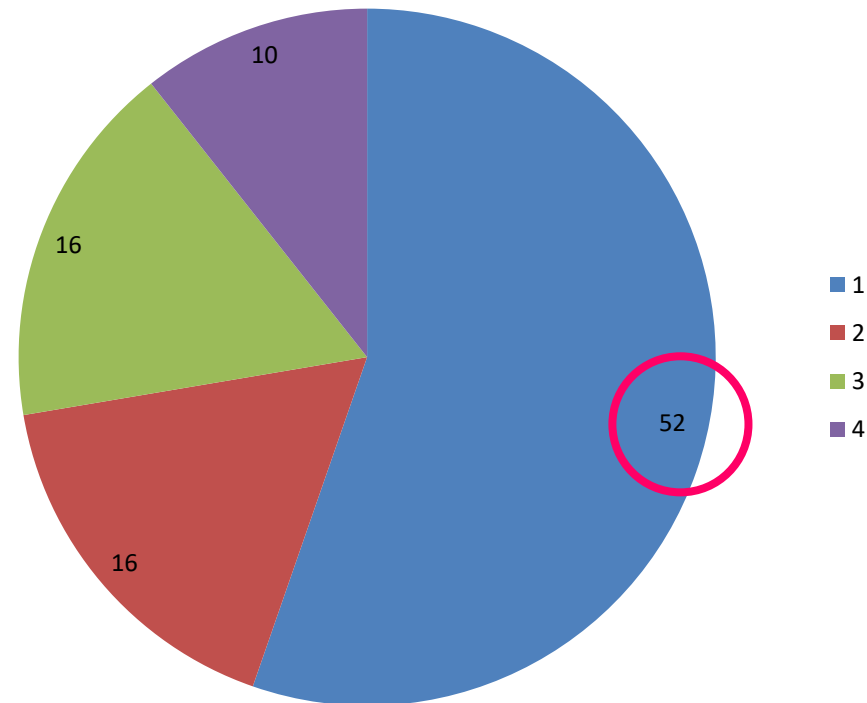
- ① あるものがなんであるかについて、人間が勝手に決めることはできない。
- ② あるものがなんであるかは、人間の理解によって変わる。
- ③ 人間は初めて見たものについて、それがなんであるか分からない。
- ④ イデアはこの世界とは別の世界に実在する。



# 問6

- アイデアが個物とは別に実在すると仮定すると、どんな困難が生じるか。

- ① アイデアと個物を「同じ」とみなすための別のアイデアが必要になり、無限後退に陥る。
- ② 第三の人間から見ないと、アイデアが正しいかどうかわからなくなる。
- ③ アイデアが個物に内在するという事実と反する。
- ④ 個物を見るとアイデアが見て取られるという事実と反する。

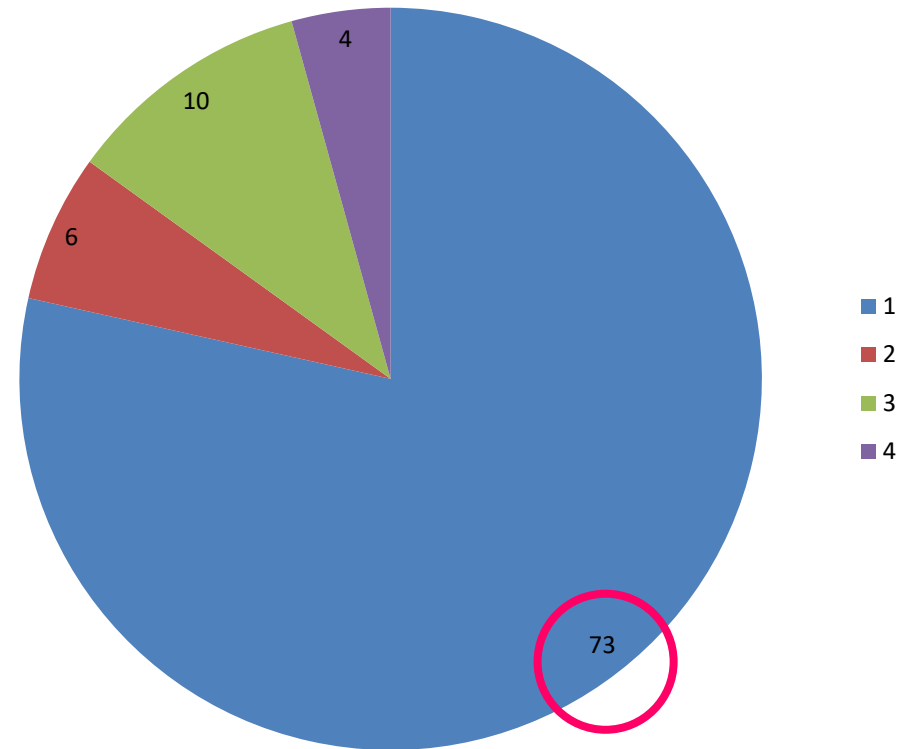




# 問7

- アリストテレスは、プラトンのイデア論の難点を克服するためにどう考えたか。

- ① イデア（形相）は個物にある。
- ② イデアは、イデア界ではなくこの世界のうちで個物とは別の場所にある。
- ③ イデアは実在せず、個物しか実在しない。
- ④ イデアは人間の頭の中にある。



授業へのコメントとそれへの応答

# 質問三点セットをよろしく。

- その質問をする理由。
  - 「知りたかった」とか「気になった」といった主観的理由ではなく、それを知ることの目的や意味。
- 自分なりの解答。
- そう解答する理由や根拠。

# 因果関係と論理

- アリストテレスは原因と結果の関係を考えたが、原因と結果の存在は経験によらないとわからないので、経験より論理を重視する哲学では探求できないのではないか。
  - 「AだからB」は論理の関係。
  - 人間が世界を理解するときに、「AだからB」というふうに、理由(原因)を明らかにすることで納得する。
  - 世界そのものが、「AだからB」という秩序を持っている。

# 様々な可能性

- 卵がニワトリになるのは可能態としてニワトリのアイデアを持っているからだというのはもっともらしい。しかし、人工物について考えると、卵は料理になり、鉄は仏像になり、木は紙になる。人の手が加えられる場合には、すべてのものが別のすべてのものになる可能性を持っているのではないか。
  - 卵は料理になるが、鉄は料理にならない。
  - 人間が、あるものAを加工して別のものBにするときに、ちゃんとBになる可能性(ポテンシャル)を持ったものを選ばないと、Bはできない。
    - これがうまくいくようなものAは、Bになる可能性を持っている。
    - すべてのものが別のすべてのものになる可能性を持っているわけではない。

- このように、ものはさまざまな形相を現実的に、あるいは可能的に持っているが、それらさまざまな形相には、

- 「ニワトリの形相」のように、「それが～である」ことを決めるようなもの（本質的なもの : essential = be動詞 = ～である）と、

- 種類わけには関わらないがその種類のものが必ず伴うもの（卵は食えるが鉄は食えないなど）、

- その個物がたまたま持っているもの（この卵は赤いとかまずいとか）（偶有性 : accidental）

がある。

# アイデアに中間はない

- 卵はニワトリの形相を可能態として持つと言っていたが、卵からまず生まれるのはひよこなので、ひよこの形相も可能態として持っているのではないか。
  - 個物は可能態から現実態へと連続的に変化する。
  - 形相の方は変化しない。（「卵」と「ニワトリ」の中間の概念はない）
    - ひよこは「ニワトリの子供」=ニワトリの形相が完全に現実化するまでの途中の段階。
    - 変化が止まったところが形相が完全に現実化した状態。
    - この世界は、可能態としての形相が実現化していく過程。

# 同じような質問として

- 「卵はニワトリにしかない」と言っていたが、赤色の絵の具は、青色と混ぜると紫色になる。ある色の絵の具は、他の色に変化できる。
  - 赤色の絵の具は、青色と混ぜると紫色になる可能性を持っている。他の色にはならない。
  - 可能態の議論の要点は、「ものの性質は、ものの側において決まっている（人間がそれを見たり思ったりしても変わらない）」ということ。
- ◆ アリストテレスの考えは、「存在論」。それがわかりにくいのは、近代哲学が「認識論」に傾斜したから。



# 神について

- 第一原因が神だというのは、納得しがたい。日本では神を信じる人が少ないからだろう。
  - 「あなたが納得できなかった理由」ではなく、アリストテレスの理論について、どこがどうして納得できなかったのかを説明してください。
    - 外在的な批判: 理論の内容にかかわらず、別の考え方を当てはめて否定する。
    - 内在的な批判: 理論の内容のある部分が論理的に飛躍している、別の部分と矛盾する、など、理論を前提として、理論自体を批判する。
  - 全般的に、「神」という単語に反応しているコメントが多かった。
    - ヨーロッパ文明はキリスト教文明なので、それを理解するためには神を理解することが必要。

# 神の存在・死後の世界に対する見方(2000年)



- 本川裕「社会実情データ図録」
- <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/9520.html>

前回分の小テスト

# 問1

- 卵がニワトリになることを、アリストテレスが説明すると、
  - ① 卵はニワトリの形相を現実態として持っている。
  - ② 卵はニワトリの形相を可能態として持っている。
  - ③ 卵はニワトリの遺伝子を持っている。
  - ④ 卵においてニワトリの形相が生成する。

## 問2

- あるものを理解するには、
  - ① その名前を知れば十分である。
  - ② 知識の体系の中にそのものを置くことが必要である。
  - ③ そのものだけをひたすら観察すればよい。
  - ④ アイデアを想起することが必要である。

# 問3

- 家があることの「目的因」は、
  - ① レンガや材木。
  - ② 屋根や壁や出入り口で構成されている。
  - ③ 大工さんが働く。
  - ④ 雨風をしのいで住む。

# 問4

• アリストテレスは、世界の第一原因としてどのようなものを考えたか。

- ① 不動の動者
- ② 不動産屋
- ③ 踊る動者
- ④ 美人のねえちゃん

# 問5

- アリストテレスにおいて、世界は、
  - ① 本来的なあり方が実現していく過程。
  - ② 神が創造した自然法則にしたがう。
  - ③ 本来は秩序がないが、人間が経験により秩序を与える。
  - ④ 言葉で記述しつくせない神秘を含む。



今回は、デカルトによる転換と  
その後の展開

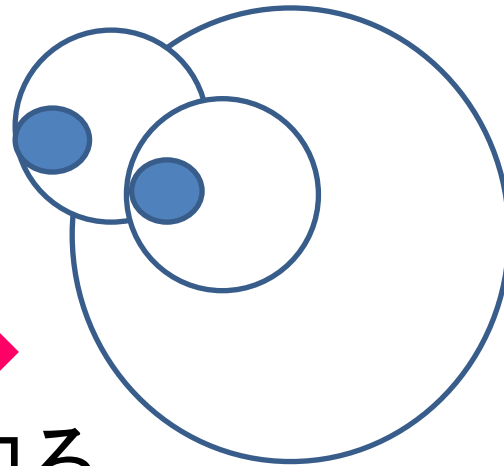
# アリストテレスの哲学(まとめ)

- 世界を理解しようとする哲学。
  - 生成変化するものに、普遍で不変な概念(イデア・形相)を当てはめる。
  - 個物は、substance + formとして実在する。
  - 生成変化を、原因-結果の体系で整理する。
  - 第一原因として「神」がある。
  - 世界は、本来的なあり方が実現していく過程。
- 12世紀以降、アリストテレスの哲学とキリスト教神学の統合が西洋思想の中心課題に。
  - いわゆる「スコラ学」。

要するに、アリストテレスの「知識」の図式は、

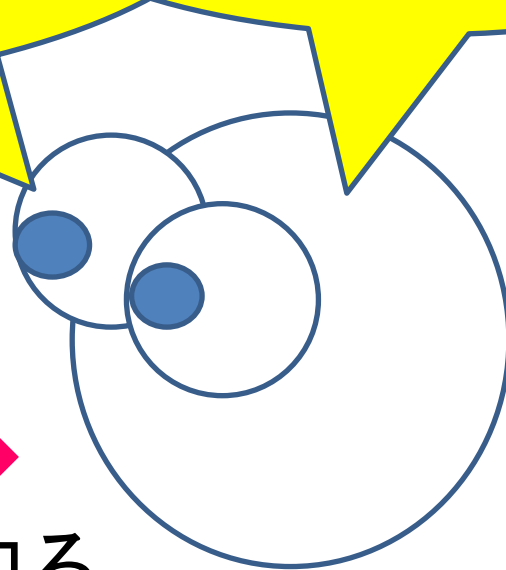


正しく知る



感覚は間違えることがある。夢を見ているのかもしれない。悪い神がだましているのかも。

でも、私の心があることは確実だ。



物

Substance  
+ form



正しく知る

どうやったら正しく知れるのか？

絶対正しい知識には、どんなものがあるか？

# しかし、だとすると、

- この世界には、私の心しか存在しないことになる。
- **そこで、デカルトは神の存在を証明する。**
  - 「神は無限。私は有限。有限は無限を生まない。だから神は存在する」
- **そして、私の心の外側にある世界のすべてを取り戻す。**
  - 神はだまさない。
  - 神は世界と私を創造した。
  - そのとき、数学や自然法則も創造した。
- それはウソくさい、と思うでしょう。
  - **しかし、この部分の論証を受け入れるか、他の論証を考えないと、世界には私の心しか存在しないことになる。**

# こうして、デカルトの図式は、

両方、神が創造

心

数学や  
自然法則

物

数学や  
自然法則

数学や法則  
は生得的。

数学や自然法則を当  
てはめることで理解。

「自然法則」という概念は、デカルトが、神による世界の創造を前提として考え出した。

# デカルトの図式は、

- 結果的に、なにやらプラトンぽい。
  - 「**自然法則の实在**」を前提する自然科学は、実は、神による創造説を前提としている。
- しかし、そこに至る過程で、「心」の側を重視した。
  - **認識論**：我々が「正しい知識」を得るにはどうすればよいか。⇔**存在論**
  - ものそのものは、知りえない。
- 心は、物体とは別の実体 (Substance)
  - Res cogitans (思惟実体：考えるもの) / Res extensa (延長実体：大きさがあるもの)
  - 同時代、批判はあったが、「**心身二元論**」は次世代に受け継がれた。

# デカルト哲学からの帰結

- 「**自然法則**」という概念
- 生成変化＝空間的な変化（**運動**）
  - アリストテレスでは、物体の「生成変化」には運動だけでなく、成長や性質の変化（化学変化）も含まれた。
  - 自然学（physics）から**近代物理学**（力学mechanics）へ。
    - デカルト自身、慣性の法則・エネルギー保存法則を提唱。
- 哲学の中心課題が、**存在論から認識論**へ。
- 「**心身問題**」
  - 心と身体（物体）が別の実体なら、どうして心は体を動かせるのか？